長谷寺かわら版
百日紅
88号
2014（平成26）年
甲午　1月1日

還暦と数え年

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

さて、2回に分けて仏像の話をしました。いささか小難しい話になってしまいましたので、今回はひと休みして、仏教とは全く関係のない話をします。お正月とは多少は関わる話です。

私は今年で、なんと還暦を迎えました。迎えてしまいましたといったほうが、気持ちとしては近いです。「中年」という言葉に抵抗を感じていたのに、いきなり老人にさせられてしまったみたいです。まあしかし、最近とみに、老人力が付き始めているのもたしかです。

当然、同級生たちも多くが還暦なので、その話題の便りが届きます。

その便りには「○月×日にいよいよ還暦になります」なんて書かれていたりします。その日はきっと60歳の誕生日なのでしょう。どうやら最近は、古稀（70歳）や米寿（88歳）のように、還暦を60歳の別の言い方と思っている人が少なくないようです。だけどその理解は、少しだけ違っています。今回はそういう話から。

☆還暦とは何か

還暦とは、文字通り「暦に還る」という意味で、この場合の暦は「自分の生まれた年の暦」のこと。還暦はその生まれた暦に還ることで、本来は年齢を示す言葉ではありません。

私が生まれたのは1954年（昭和29年）で、甲午と呼ばれる年です。このような年の表記を干支といいます。ふつうはこれを干支と読み、今年の干支は午というわけですが、午は干支のうちの「支」だけのことで、前半の「干」が加わらないと干支にはなりません。干が甲で支が午の年が、甲午という年です。

この干支は、10の干と12の支の組み合わせですから、最小公倍数の60年で一巡します。だから甲午という年は、60年に1度しか巡って来ない。そしてまさに今年、60年ぶりに甲午が巡って来ました。1954年生まれの私たちが生まれた年の暦に還ったわけです。だから私たちにとっては、今年が還暦。

そして甲午という年を迎えるのは、正月に決まっていますから、還暦は誕生日でなく、正月に迎えるということになります。

ポイントは、生まれた暦に戻るということで、年齢でいえば、満年齢が60歳になることではなく、実は数えで61歳になることです。その意味では、還暦は数え年61歳の別名であるともいえます。ただ、数えで61歳になっても、まだ正月ですから、満ではほとんどの人が59歳。残念！

還暦は、自分の生まれた暦が再びめぐってくること。だから、誕生日に迎えるものでも、満60歳になることでもない。還暦についての認識はこのことに尽きます。

還暦の本来の意味が忘れられつつあるのは、満年齢という考え方が定着したということもあるのでしょう。1954年生まれなら、年内には必ず満60歳になります。数えで61歳になる正月よりも、満60歳の誕生日の方が、キリもよく、いかにもめでたそうです。

☆長寿の祝い

あえてもうひとつ付け加えるなら、還暦は本来、長寿の祝いだということです。これは、いまの時代の感覚では理解できないことかもしれません。しかし、寿命がいまよりずっと短かった時代には、自分が生まれた暦に再び出会えるのは、きっと稀有のことだったのでしょう。それだけ長生きできた、めでたいことだと祝ったわけです。

生まれた年の暦に戻るという意味で、赤いものを身に着けました。赤い頭巾を

かぶり、赤いちゃんちゃんこを着たのは、人生をリセットして、もう一度赤ちゃんに戻る。そういう再生の願いを込めた儀式が、還暦の意味でした。

ちなみに、赤ちゃんに戻るから赤いものを身に着けたわけでなく、赤ちゃんが魔よけのために赤いものを身に着けた、そのことにあやかろうというわけです。

☆61回忌

法事は、いわば亡くなった人の数え年の法要です。1周忌だけは別ですが、あとは3回忌も7回忌も、亡くなった年を1として、ここから起算します。

真言宗では、13回の法事をするのが基本ですから、13回目の法事である33回忌がいわば最後の法事。かつては、これで法事はおしまいとされました。しかしその後、50回忌や61回忌、さらには100回忌、150回忌と、法事は増えていきました。

61回忌がいつごろから行われるようになったのかはよく分かりませんが、意味するところは亡くなった人の還暦でしょう。長寿の祝いの概念を法事に持ち込むのもどうかと思いますが、まあ別の世界に生まれ変わったと考えるなら、来世での還暦を祝うというのも意味のないことではないかも知れません。だったら、77回忌とか88回忌とかもやればいいと思いますが、まあそれはあんまりですね。

ともあれ今年は、1954年に亡くなった人の61回忌の年でもあります。

さて、還暦の話をするのに、十干十二支の説明は欠かせないのですが、この話は漢字ばかりが並んでつまらないので、よします。干支は60年ごとに一巡することと、あとはご自身の干支を知っていれば、それで十分です。

甲の次は乙で、その次は丙。午の次は未で、その次は申。来年は乙未の年で、再来年は丙申の年です。

☆数え年

還暦は生まれた暦に還ること。年齢でいえば数え年61歳になることでした。

ところで、ひとつ歳をとるとは、1年という時間を生きたことに他ならないわけですが、数え年という考え方は、これとは少し異なります。「百日紅」の読者はお歳を召した方が多いので、数え歳には抵抗は少ないでしょうが、ある程度の年齢以下の人たちには、とても納得しにくい考え方のようです。なにしろ歳をとるのは、誕生日ではないのですから。

郷里の注連飾りは鶴型です

歳は、生まれた時にすでに1歳で、2歳からは正月にとるものでした。なぜなら歳は、決して自分で獲得するものではなく、正月に家を訪れる年神さまからいただくものでした。その年神さまを迎えるための飾りが、門松や注連飾り。

年神さまに供えるのが鏡餅。その餅に年神さまの魂が宿ります。その餅を食べることで年神の魂、「年魂（年玉）」をいただくことになります。こうしてその年の魂をいただくことで、年をひとつとるわけです。

私が幼い頃は、正月の餅は歳の数だけ食べるものだと言われたものでした。これなどまさに、年齢と餅の関係を示しています。

お年玉とは、神からいただく魂に他ならなかったわけです。これがいつしか、年長者から、つまり年魂を多く持つ者から子どもがそれを分けてもらうという形の、「お年玉」という名前の「お小遣い」に変化しました。

生まれた時点ですでに1歳なのは、生まれたときに、年神の魂をいただいているからです。魂を受け取り（享け取り）、歳をとる。亡くなった人に使われる「享年」という言葉はこれを示したものです。だから享年は数え年です。

それに、物事の始まりは1に決まっています。いまは生まれて1年未満の子どもは、ゼロ歳児と呼びますが、0から始まるなんて、やはりどこか不自然。フーテンの寅さんの啖呵だって「ものの始まりが一ならば」が決まり文句。平成だって1年から始まりました。

「ひとつ」という言葉はあっても、そのひとつ前の数を表わす言葉は、日本語にはありません。零は中国語、ゼロは英語です。ひと

つのひとつ前は、「なし」では話になりません。

☆誕生日はいつ来る？

この、正月に年神から歳をいただくという考え方は、誕生日が来ればひとつ歳を重ねる、言い換えれば、自らが1年という時を生きることによって歳を獲得するという今の考え方とは異質のものでした。そもそも誕生日を祝うなんて習慣は、日本にはありませんでした。

誕生の日を特別視しないことは、旧暦の性格にも起因しています。

旧暦（太陰暦）のひと月は、月の満ち欠けの時間です。しかし月の満ち欠けの周期は約29.5日ですから、12ヶ月で354日。太陽の動きの1年は365日ですから、1年で11日のずれが生じます。ずれが重なれば、正月が夏にやって来るということにもなりかねないので、3年に1度くらい、特別の月を作って、このずれを調整しました。これが閏月（うるうづき）です。

たまたま今年は、この閏月が入る年で、9月の次に閏9月が入っています。つまり今年は、旧暦ではなんと13カ月あるわけです。

いまは誕生日から12か月経てば、必ず同じ日が巡って来ますが、旧暦ではそうとは限りません。例えば、去年の10月1日の12か月後は閏9月1日なんですから。また今年の閏9月1日に生まれた子にとっては、次の閏9月1日が巡って来るのは、ずっと先のことになります。これでは誕生日など意識しにくいですね。

閏月をいつ、どの月の次に入れるかは、決まった法則がありますが、これも時代や地域によって異なりました。旧暦というのはこのように、ひどく複雑で分かりにくいものでしたから、人々の暮らしにとって、暦（こよみ）の大切さは、いまのカレンダーとは比べようもないほどでした。

☆7（なな）つ行き

生まれた時は1歳で、正月に歳をとるという数え年の習慣は、人々の生活に深く根付いたものでした。

「7つ行き」という言葉があります。いまでもふつうに使う人がいます。私は（彼は）「7つ行きだ」といえば、「早生まれだ」ということと同じ意味でした。

「7つ行き」というのは、本来なら8歳になって小学校に入るのに、「（1歳早く）7歳で入った」という意味の言葉です。だから私は（彼は）「早生まれですよ」、ということになります。

小学校に入る年齢の話ですから、日本語としては、明治以後の比較的新しい言葉です。明治時代に整った教育制度で、小学校に進むのは、満6歳と定められました。しかし、数え年社会に生きる庶民はこれを数え年に読み替え、小学校に進むのは8歳と理解しました。

たとえば、この春小学校に入学するのは、2007年4月2日～2008年4月1日生まれの子どもで、今年の4月1日には、みんなが満6歳になっています。4月1日生まれの子がすでにその日に6歳になっているのは、歳は誕生日の前日の午後12時に、つまり前日が終わり、誕生日が始まる時点でとるものとされているからです。

これが数え年だと、2007年生まれなら8歳で、2008年生まれだとまだ7歳。生まれ年で年齢が決まるからこうなるわけです。このあたり、ちょっとややこしいですね。

いずれにしろ、多くの人々は、長く数え年の生活をしてきました。ごく最近までその習慣を残してきたことは、「7つ行き」という、新しいはずの言葉の中にもみられるわけです。

☆満年齢の時代へ

1歳から始まるというだけでなく、同じ年に生まれた者は揃って同い年。数え年は、ある意味とても合理的な考え方だと思うのですが、明治政府はこの習慣を何とかして改めようとします。

1902年（明治35年）、政府は「年齢計算に関する法律」を制定し、「年齢は出生の日よりこれを起算す」と定めました。歳は誕生の日から計算する。誕生日を起点とし、そこから1年経って、ようやく1歳になる、というわけです。

誕生日から計算するなんて当然ではないかと思われるでしょうが、繰り返し書いたように、数え年は誕生日からではなく、誕生の年から起算する方法でした。同じ年に生まれた子は、当然ですがみんな同い年。そして、1歳の次は2歳で、その中間はありません。

なぜそうなるのか。正月になると歳をひとつとりま

すから、暮れも押し詰まった頃に生まれ子は、1歳を数日生きただけで、すぐに2歳になります。これに対し、1月生まれなら、1年近く1歳のままです。1歳を1年近く生きる子と、1歳をわずかの期間しか生きない子がいるわけです。

ところが、誕生日から起算すると、同じ1歳でも、1歳と10日とか、1歳1か月とか、年齢を細かく表わし、比較することができます。

時は日清と日露の戦間期。西洋の先進国の仲間入りを目指す政府は、近代国家には数え年は似合わないと考えました。なにしろ数え年は英語では「East Asian age reckoning」といいます。「東アジアの年齢計算法」です。当時アジアは、文明の遅れた地域と考えられていましたから、そのアジアの年齢計算法も遅れた方法と考えたわけです。

この法律の施行後、満年齢は少しずつ広がっていったことでしょうが、やはり伝統的な数え年の習慣は、そう簡単に変えられるものではなく、満年齢と数え年が混在する時代が長く続きました。

太平洋戦争中には、物資の配給をめぐって、この混在が社会に混乱をもたらしたこともあったようです。同じ日に生まれても、数えと満では2歳も違います。政府が満年齢を基準に配給量を算定しても、受けとる側が数え年の立場なら、不満を感じる場面も少なくなかったことでしょう。

「年齢計算に関する法律」から半世紀を経た1950年（昭和25年）、政府は「年齢のとなえ方に関する法律」を定め、「国民は、年齢を数え年によって言い表す従来のならわしを改めて、年齢計算に関する法律の規定により算定した年数によってこれを言い表すのを常とするように心がけなければならない」と、明治時代に出された法律を再度強調するとともに、「政府は、国民一般がこの法律の趣旨を理解し、且つ、これを励行するよう特に積極的な指導を行わなければならない」と付け加えました。

半世紀経ってもなくならない数え年の習慣を一掃するため、政府が本腰を入れ始めたわけです。数え年という考え方が、いかに人々の暮らしに深く根付いたものだったかがわかりますね。

私が生まれたのはこのわずか4年後。数え年一掃の「指導」が始まって間もない頃です。それからさらに半世紀以上の時間が過ぎ、数え年はすっかり過去のものになったように思えます。

▽　△

満年齢が定着したということは、正月には歳をとらなくなったということです。年をとらないのなら、年神さまを迎える必要はないだろう。近年、正月に注連飾りや松飾りをしない家が珍しくなくなったのは、そんな風に考える人が増えたせいでしょうか。

年神さまが運んで来るのは、なにも年の魂だけではない。その年の幸福や豊かな実りも、この神さまのプレゼントのはずなのですが。

街角通信

昨秋、お隣の児童館が引っ越しをしました。この施設で長く学童保育が行われていました。

開設されたのが1964年といいますから、ちょうど半世紀前。49年と半年、お隣さんだったわけです。

夏休みには子どもたちが網と虫籠を持って、境内にセミを採りに来ました。樹木が多いので、かくれんぼの絶好のフィールドでした。この寺は子どもの声がすると、珍しがられました。その子供たちの姿が境内から消えました。

県立鳴門第一高校が市立工業高校と合併し、うずしお高校に名前を変え、移転作業が進んでいます。

第一高校時代は、野球部が金毘羅神社の石段でトレーニングをしました。彼らの姿も、合併で見られなくなってしまいました。

牧歌的な雰囲気が残る地域でしたが、それも過去のものになりつつあります。

発行　長谷寺
編集　裕信

〒772-0004
鳴門市撫養町木津 1037-1
電話 088 - 686 - 2450
ﾌｧｸｽ 088 - 686 - 2130
E-Mail
cho_kuma@mwb.biglobe.ne.jp
URL
http://www.chokokuji.jp/